

サンデル著 *The Tyranny of Merit* の紹介

北川邦一

鬼沢忍訳『実力も運のうち 能力主義は正義か?』が 2021 年 4 月、早川書房から発行された。原著は、Michael J. Sandel 著 *The Tyranny of Merit* (The BookDepository Limited 2020 年 9 月 10 日、初版発行) である。

筆者は、*The Tyranny of Merit* 「メリットの専制」に関して、以下の論稿を発表してきた。

①「共通内容教育と選択学習のあり方」(米山俊直ほか編『社会文化の諸相』1998 年大手前女子大学発行所収。以下 98 年北川稿と略記)

②「教養論の今日的意義と教養の概念—教養と共通内容教育のあり方、その 1—」(2001 年 3 月大手前大学社会文化学部論集第 1 号。以下「01 年北川稿」と略記)

③「教養と能力主義・メリトクラシー」(2002 年 3 月大手前大学社会文化学部論集第 2 号。以下「02 年北川稿」と略記) で論じた。

これらの 3 稿は、2021 年 9 月 30 日現在、北川ホームページ <http://kitagawakunikazu.com/>、及び、高校教育ネット <https://ins.jp.org/> で閲覧可能である。

02 年北川稿は、「*The Tyranny of Merit* メリットの専制」に関連して、下記の通り、記していた。

「業績主義(メリトクラシー)とは、ある人の評価・処遇(報酬や職務、学芸の上での地位役割)を専らある人の挙げた業績に応じて行なうという原理であると……考える。挙げた業績に応じて人の評価・処遇が行なわれれば、業績を挙げる努力は助長され社会は業績による利益を享受することができる。業績主義の成立する根拠はここにある。しかし、各人の業績はその能力・適性に規定され、各人の能力・適性には差があるが、ある一定の時点での個人の能力・適性は煎じ詰めればそれまでの当人の生育歴や社会活動歴という自然的社会的条件に規定されており不平等である。例えば、障害をもって生まれた人や孤児として育った人は本人の責任によるのではない条件によるハンディキャップを負っている。反対に、恵まれた条件で育った人が社会的に高く評価される能力や意思を持ち易いのも『自然』的で、この意味で人の業績は本人の努力から独立な条件によるところも大きい。このように考えると、人の評価・処遇をその業績に基づいて行なうのは『不平等』の拡大とも考えられる。人の業績は評価すべきだとしても、自然条件・社会条件の差をそのまま再生・拡大しかねない業績主義は、それだけでは人間性に沿ったものとは言い難い。この点に業績主義への批判の正当性があると考えられる」(15・16 頁「中間まとめに代えて」)。

鬼塚訳発行後、池上彰とマイケル・サンデルとの zoom 対談「能力主義が社会を分断させた」(『週刊文春』2021 年 8 月 12・19 日夏の特大号、(株)文芸春秋刊、52-56 頁) が発表された(構成・石井謙一郎)。対談でサンデルは、同年 1 月に就任した米国のジョー・バイデン大統領が COVID-19 に関して 1.9 兆ドルの助成金を充てている施策及び道路や鉄道、水道や高速通信網などの社会インフラへ 8 年間で合計 1.2 兆ドルの投資をすることにしたこと、後者により建設工事などで労働者の職を創出する効果も生まれることなど具体的施策への言及もある。

サンデルが、個人の長所乃至能力を意味し、それが社会にもたらすものとしての功績乃至業績を意味するものとしてのメリット (*Merit*) を、標記の著作及び池上彰との対談において、理論のみならず、最近の現実政治にも留意して論じていることから、深く学びたい。

なお、鬼塚忍翻訳書の 326-332 頁の本田由紀の「解説」は、サンデル所論の概要理解の簡潔明瞭な参考と出来るであろう。